

恵海氏著「日本はどこで道を誤ったか」を読む 日本経済新聞社「大機小機」2008年8月22日刊

1. 世界景気の低下が明白となってきた。

(1) ユーロッパでは…

- ① ユーロ圏 15 カ国の 4 - 6 月期の域内総生産(GDP)は前期比で実質マイナス 0.2 % となった。
- ② 7 - 9 月期も低下が見込まれ、リセッションと予測される。

(2) 新興国では…

- ① ブラジルは既に減速局面に入った。
- ② ロシアは資源価格の急落やグルジア紛争が加わって海外からの資金流入が減り始め、減速は不可避のようだ。
- ③ インドもインフレ高進による引き締め強化から成長率を下方修正している。
- ④ 中国は消費や設備投資の減速が伝えられ、北京五輪後の急低下が危惧されている。
- ⑤ <まとめ>

こうした事実は「米国が停滞しても新興国やユーロ圏などへの影響は軽微」というデカップリング(非連動)説が錯覚であることを明確に示している。

(3) 日本では…

- ① 内閣府が今年度の GDP 成長率の見通しを実質 1.3 % へと下方修正したが、民間予測の平均値は 0.7 % であり、ゼロ近傍との予測も出始めている。
- ② 政府の緊急経済対策は予算面での制約が大きく、効果は限定されそうだ。
- ③ 家計部門は所得の停滞や雇用不安、物価の急騰などから消費を控えている。
- ④ 企業部門でも収益は低下傾向にある。
- ⑤ <まとめ>

(ア) 企業も家計も政府も皆立ちすくんでいる。

(イ) 海外の有識者たちは「日本国の期待収益率はマイナスであり、投資に値しない」と明白に指摘している。

2. 「日本はどこで道を誤ったか」。

(1) 第一は政府が改革を中断し、あるいは中断したとの印象を内外に与えてしまったことである。

(2) 第二は「企業は株主のものであり、企業の目的は株式時価総額の最大化を短期に達成すること」との経営理論をうのみにし、非正規雇用の急拡大や賃金の過度の抑制によって

(3) 家計部門を疲弊させてしまったことである。

3. 誤った道を正し、日本が世界の信頼を得るために…

(1) まず政府は…

- ①改革を継続し、
- ②高福祉・高負担の原則を国民に徹底すべきだ。

(2) 企業は

- ①研究開発投資を増やして
- ②高度先端技術商品を世界に提供し、
- ③高収益を獲得する必要がある。
- ④技術開発や商品化、販売を担うのは株主ではなく従業員である。

⑤<まとめ>

- (ア)世界経済が回復に向かうまでの数年間
- (イ)企業は配当を若干減らしてでも
- (ウ)研究開発投資を増やし、
- (エ)収益が上がれば労働分配率を引き上げる必要がある。

(3) 家計部門は…

- ①政府や企業への安易な依存を慎み、
- ②支出や借入れを再検討することで自らのバランスシートを健全化し、
- ③家族やコミュニティーの再活性化に努力していくことが肝要である。

<コメント>

「恵海氏」の卓越した日本経済再生への具体策は示唆に富み、参考になる。

この「恵海氏」の見解は、ジョン・C・ボーグル著、瑞穂のり子訳、「米国はどこで道を誤ったかー資本主義の魂を取り戻すための戦いたー」東洋経済新報社 2008年3月20日刊

「真に健全な事業は力強い道徳基盤の上に築かれると信じている。」という考えと軌に一にしていると思われ、高く評価される。

－ 2008年8月24日記－

(林 明夫)